2010年07月29日

２千人が過労死の危険ラインとされる月残業８０時間超　霞が関の公務員調査

東京・霞が関の中央官庁で働く国家公務員のうち、過労死の危険ラインとされる月平均８０時間以上の残業をしている人が推定で２千人を超えることが２８日、霞が関国家公務員労働組合共闘会議（霞国公、組合員約１万人）のアンケートで分かった。

約３千人を対象に実施され、６・３％が残業は８０時間以上と回答。
霞国公は「霞が
関で働く一般職員は約３万４千人おり、単純計算で２千人超に当たる」としている。

調査によると、月平均の残業時間は３２・８時間（昨年調査３６・３時間）。
８０時間以上あったとした職員のうち、約２２％が「現在過労死の危険を感じている」、約３６％が「過去に危険を感じたことがある」と答えた。

省庁別では、厚生労働省の労働部門が７３・４時間（昨年調査６６・３時間）で最長。次いで同省の厚生部門が７１・７時間（同７１・２時間）、経済産業省が４５・９時間（同５０・５時間）だった。